



## 夏の暑さに強い水稲早生品種「愛知135号」を開発 (令和2年3月品種登録出願)

本県の水稲早生品種は、夏の暑さによる玄米品質の低下が問題となっており、作付が極めて少なくなっています。その結果、極早生品種と中生品種に作付が集中し、作業競合が問題となっています。そこで、新たな早生品種「愛知135号」を開発しました。「愛知135号」は、同熟期の「あさひ

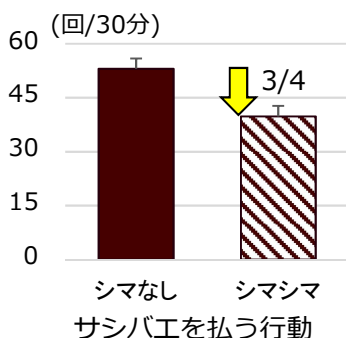
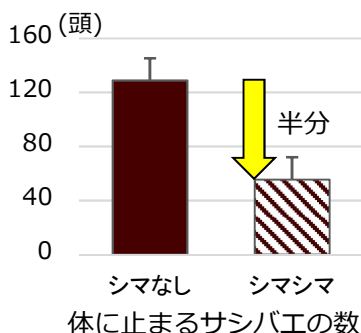
の夢」と比較して、暑さによる品質低下が生じにくく、玄米の光沢と透明感が優れます。また、大粒で精米時の歩留まりが良いなど中食用途の適性もあります。「愛知135号」の導入により、本県産米の評価向上と、作業競合の緩和が期待されます。

(作物研究部)

本品種は愛知県経済農業協同組合連合会との共同研究により開発しました。



# 牛をシマシマにしたら...吸血昆虫対策の新技术を開発



黒縞ではサシバエは減りませんでした。

シマウマの縞(シマ)は何のためにあるのかという進化生物学上の論争があります。最近になって、縞は吸血昆虫に刺されにくくするためではないかという説が主流になりつつあります。そこで、日本が誇る黒い和牛をシマシマにするとどうなるのかを調べました。その結果、市販の白いラッカー

スプレーでシマシマの“シマウシ”にすると、体に止まるサシバエが半分以下になり、追い払う行動が3/4になりました。

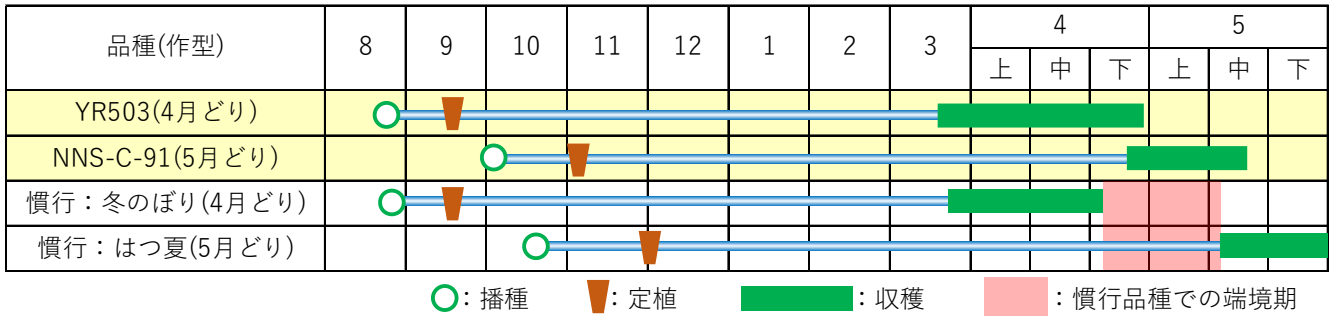
本技術は、牛の病気を媒介したり、ストレスを与えることで生産性を下げるサシバエに対し、殺虫剤を使わない防除対策として期待できます。(畜産研究部)

本研究は京都大学との共同研究で実施しました。



# 4 - 5月どり寒玉系キャベツの安定生産に向けた品種選定とその栽培技術を開発

愛知県における寒玉系キャベツ4 - 5月どりの作型

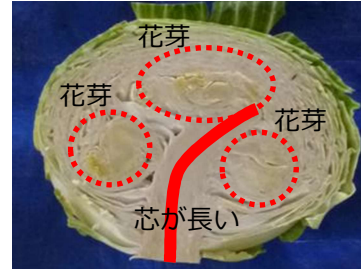


「YR503」栽培基準 (4月下旬収穫)			
播種・定植	8月下旬播種・9月中旬定植		
栽植密度	5556株/10a (畝間60cm、株間30cm)		
施肥方法	基肥	追肥1	追肥2
	定植時	10月上旬	12月下旬
	14.0kgN/10a	9.6kgN/10a	9.6kgN/10a



「YR503」(花芽未発達)

「NNS-C-91」栽培基準 (5月上旬収穫)			
播種・定植	10月上旬播種・11月上旬定植		
栽植密度	5556株/10a (畝間60cm、株間30cm)		
施肥方法	基肥	追肥1	追肥2
	定植時	1月下旬	3月中下旬
	8.4kgN/10a	9.6kgN/10a	9.6kgN/10a



慣行「冬のぼり」(花芽伸長)  
4月下旬収穫時の花芽の状況

県内のキャベツ主要産地では、加工業務用に利用する寒玉系品種を、11月から6月まで長期間出荷しており、出荷期間を通じた安定生産が求められます。しかし、現状の主要品種では4月下旬から5月上旬に端境期が生じています。その解消のため、4月どりと5月どりの2作型について、端境期に収穫可能な新品种「YR503」と「NNS-C-91」を選定し、それぞれ適した栽培技術を

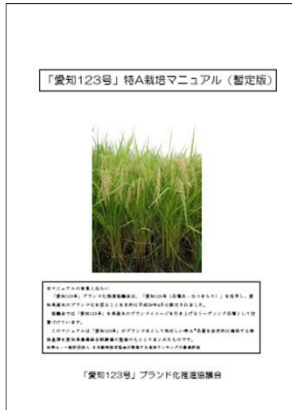
開発しました。「YR503」は4月下旬まで収穫可能で、草勢がやや弱く、小玉になりやすいものの、収穫期後半まで外観が綺麗で球内も高品質です。「NNS-C-91」は、5月上旬収穫が可能です。生育期間がやや長いものの、花芽が伸長しにくく、通常より早い11月上旬の定植が適します。これらの品種により端境期が解消され、産地の安定出荷が期待できます。(東三河農業研究所)

本研究は農林水産省委託プロジェクトで実施しました。

# 研究トピックス

## 「愛知123号」特A栽培マニュアルを作成

なつきらり（「愛知123号」）は高温耐性と良食味を併せ持つ水稲として2017年8月に品種登録し、本県のブランド米として2020年秋から販売を開始します。今回、特A相当の品質を確保するため、地力に応じた施肥方法や胴割粒を抑制するための収穫時期の目安など、研究で得られた成果を「特A栽培マニュアル」（暫定版）にまとめました。



特A栽培マニュアル

本研究は内閣府「地方創生推進交付金」により実施しています。

地力に応じた施肥方法や胴割粒を抑制するための収穫時期の目安など、研究で得られた成果を「特A栽培マニュアル」（暫定版）にまとめました。

（作物研究部）

## 高輝度LEDを用いたキクの補光栽培

日射量が少ない冬季では、ハウスの鉄骨等による日陰が原因となって、キクの生育不良や品質の低下が問題になっています。そこで、高輝度LED（出力：150W）を設置し、キクに日中照射したところ、草丈の伸長や切り花重の増加、可販花率の向上といった生育改善効果が見られました。これにより、冬季の日射不足による生育抑制や品質低下を軽減させ、キクの安定生産に繋がるのが期待されます。

（東三河農業研究所）



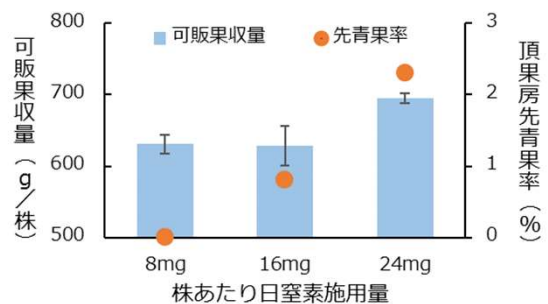
設置された高輝度LED

本研究は「次世代花き産業確立推進事業」により実施しています。

## イチゴ品種「ゆめのか」の先青果発生と窒素施用の関係性を解明

「ゆめのか」の先青果について発生条件を解明するため、窒素施用量の違いがその発生に与える影響を調査しました。頂果房の出蕾8日前から出蕾期まで、窒素施用量を多くすると、出蕾期の窒素吸収量が増加し、頂果房の先青果率が高まることが明らかとなりました。一方で、3月までの可販果収量と収益が増加することを確認しました。

（園芸研究部）

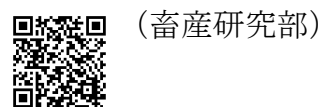


頂果房出蕾8日前からの窒素施肥による収量と先青果率との関係

## 「新肉用名古屋コーチン飼養管理マニュアル」を作成

2018年11月から肉用新系統”NGY7“を種鶏とした「新肉用名古屋コーチン」が農家に普及しました。そのため、新肉用名古屋コーチンの標準性能や、生菌剤添加による免疫能向上、LED光源による光線管理や飼料用米を利用した生産性の改善など、新たな研究成果の情報を掲載した「新肉用名古屋コーチン飼養管理マニュアル」を作成しました。

本マニュアルについては、以下のQRコードやwebページからダウンロードできます。



（畜産研究部）

<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/nososi/gijyutsujouhou.html>



作成したマニュアル